貘とハイエナ

曽野綾子 著

未央書房

漠とハイエナ

昭和42年9月10日　印刷
昭和42年9月20日　初版

定価 390円　〒70円

著者　曽野綾子
発行者　沖津武
印刷所　合資会社 光明社

発行所　東京都新宿区角筈 3-148
電話・東京 (342)8977
振替・東京 97924
株式会社 未央書房

〈検印省略〉　落丁・乱丁は本社で取替えいたします（佐抜製本所）

社会論・人生論

貘とハイエナ

曽野綾子

未央書房

目　次

救いというもの……九
結婚の幸福とは……一四
別れについて……一九
一切れのハム……二七
闘牛場と寺院……三三
半分、死んでいる……三八
幸福の種……四三
空の空……四四
或る人生……四七
動物園……六〇
待機について……七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

安住について……七七
大根とモーター・エイジ……八二
教育への疑問……一〇〇
若者よ、心を鍛えておけ……一〇五
勉強＝出世それも幸福……一〇九
貘とハイエナ……一一四
ユーモアの効用……一一九
セールスマンの残酷……一二三
伴奏つき人生……一二八
夫の出世……一三三
署名つき……一三六
沈黙の効用……一三九
命　名……一四二

言葉の問題……一四九
或る怠け者の話……一五三
羊年の生まれ……一五五
出っ歯……一五七
二十本の口紅の蓋……一六〇
署名のない作品……一六二
小説の事実化……一六四
耳の話……一六八
本まかせ……一七二
或る分類法……一七四
文士か名士か……一七六
ひっこむ人々……一七八
メロンと父親……一八〇

ニセモノ……一八二
日　記……一八四
愛の讃歌……一八六
失　言……一八九
夢……一九二
羞恥心……一九四
理想的でない家庭……一九六
勝利者と敗者……一九八
貴重な友人……二〇〇
ないよりましな話……二〇二
開業式……二〇五
米沢牛肉……二〇八
モンテンルパを訪ねて……二一〇

美容院での空想……二二四
別に珍しいことも……二三〇
暮れの一日……二三四

救いというもの

救い、というものについて時々考える。

沖縄の南部の村で、旧家の奥さんから、戦争中の話をきいた。御主人は応召し姑と三人の子供をかかえ、とにかく兵隊さんのいる南部にさえいけば、たとえ敵が上陸して来ても、水際作戦で、すぐに撃退してくれるものと信じ切っていた。

しかし来る日も来る日も艦砲射撃と空襲が続く。情報はひとつとして当てにならない。姑とはぐれたときも、疲労していたので良心のとがめさえなかった。水を汲んでいたら艦砲の弾が飛んで来て、気がついてみたら、隣にいた人が井戸端で死んでいた。

子供がひとり死んだ時は、ああ、これでこの子を先へ送ってやれた、とむしろほっとした。悲しみではなく安堵である。子供を残して先へ死んではならぬ、とそればかり思いつめていた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

からだった。しかしその夜、砲撃がとだえて静寂が戻って来たとき、この母は自分の体中をつねった。自分は本当に生きているのだろうか。もしかしたら、ここのところ続いているのは、長い長い悪夢であって、今、目が覚めたら、自分は眩（まぶ）しい朝陽のさしこむ我が家で、夫婦親子が枕を並べて穏かに寝ているのではないか。

正気ならば、耐えがたいことを、このひとは、涙一滴こぼすこともなく経験して来たのだった。

誰がどう計ったことでもない。しかし、弱い人間のためには、どこかで、思いがけぬ救いが用意されているものらしい。

私よりもほんの僅か年長者の姫百合部隊の生き残りの方にも会った。

彼女自身、脚に貫通銃創を受け、片方の腕が、根元のところからぶらぶらになった友人と、二人だけ海岸の上の、アダンの樹陰にとり残されていた。

不思議と重傷の二人とも、痛みはなかったらしい。思い出話をし歌を歌った。水は岩の小さな凹みにあった。

辛いのは、夜寒いことだったけれど、それも半ば解決した。人々が、岩の上に捨てて行った米を集めて体の下に敷いたら、ごつごつの岩の上に体を横たえねばならないという苦しさもな

くなった上、湿気と体温で、米が発酵して来て、ほかほかと温くなって来たのである。
それでもなお夜は寒くて眠りにくかったが、日が上ると、上と下からの温気で、安らかな眠りに恵まれるようになった。その昼寝の間に、片手のもげかけた友人は息をひきとっていた。信じられないことだが、思いがけぬところに、安らかな死があったのである。
救いを、最も強く熱望するのは、死の時であるが、先日、こんな話もきいた。
大学を出て、一流会社に入った青年が、入社と同時に、愛していた娘と婚約した。秋には式もあげることになった。
その直後に、彼は体の異変を訴え、精密検査の結果、肝臓ガンと診断された。一家はキリスト教徒であり、青年の母は常日頃から、「安らかな死」を毎日祈り続けては、子供たちから「ママ、僕たちが交通事故で死んでもいいの」とからかわれたりしていた。
普通なら病人に対して真実を隠すところだけれど、教会の神父は、当人にも遠まわしに「癒らないことがあっても、それを受けとめるように」という意味の厳しい宣告をした。言う方も、家族もどれほど辛かっただろう。それ以来、病人は死を覚悟して、恋人との残された短い幸福を味って過した。

青年は運動神経もあり頑健な体だった。それだけに、ローソクの燃え尽きる迄の時間——苦痛——がいつ迄も続くことを、周囲の人々は恐れていただろう。

しかし、臨終の日には、病人には急に明かるい幻覚がやって来た。彼はスポーツのクラブにいるつもりになり、練習が終ったので、これから皆で飯を食いに行くというのだった。

「何を食べるの?」

と意識の混濁している青年に母が尋ねると彼は、

「ギョウザが食べたい」

と答えた。いかにも若い学生らしい答えだった。夢ともうつつともわからぬ言葉だったけれど、母は「そう、じゃ、今、これからギョウザを買って来てもらってあげますから待ってて頂戴」と言い、

「その間に、食前のお祈りをしておきましょう」

と言った。終戦直後のふかし芋しかないような時代にも、この一家は食前の祈りを欠かしたことはなかった。すると青年ははっきりした口調で

「主よ、願わくは我等を祝し、又御恵によりて我らの食せんとするこのものを祝し給え」

と呟いた。

それから間もなく、彼の一切の反応は消え、最期の時までは只、穏かな眠りがあるだけだった。青年は臨終の意識の中では健康であり、恐らく死の恐怖もなく、祈りを最後に最も人間的で慎しく美しい死を迎えられたのであった。

乳児院を経営しているドイツの婦人を知っている。いつも八十人ばかりの赤ちゃんが、彼女の手許ですくすくと大きくなっている。中にはお母さんが重病のため預けられた子もいる。本当の捨児もいる。

乳児の世話は地味な仕事だ。保母さんは常に足りないから、誰かがやめると時々ピンチが来る。それでもおムツはどしどし汚れ、赤ちゃんは遠慮なくお腹をすかせる。

「もういよいよ人手がなくてだめかと思う状態になると、私、祈るんです。そうすると、かならず、どこからか来てくれる人があるの。本当に不思議です。今までそれで続いて来たの」

美しい白髪のドイツ人の院長は言う。

もうだめかと思うと、思いがけない方法で救いが来る。そう言えば私にも何度か、そういうことがあった。この大らかな甘え方が私は好きである。

結婚の幸福とは…

同じ文学的分野でも、私は、俳句も和歌もたしなまない。詩は最近しみじみ書いてみたいと思うけれど、まだその決心がつかない。けれど私は送られて来る短歌の雑誌を時々ゆっくりと時間をかけて読み、私が心をうたれる歌というものが、ことごとく孤独に苦しむ歌であることに改めて、驚かされるのであった。

かつて若い日に私は、人間の心を荒廃させる目に見えぬ敵は退屈であると思っていた。誤解しないでいただきたい。退屈というものは、その人の経済状態とは全く無関係なのである。金がありあまっていても退屈し、貧乏でも退屈する。その中間であっても、むろん退屈する。そして退屈の中で女たちは姦通し、盗み、相手を陥れるのである。

しかし、私はこのごろ、退屈よりも恐ろしい第二の敵の存在をひしひしと感じるようになった。それは孤独なのである。恐らく戦乱のベトナムには、そのような恐怖はないであろう。戦争中の日本にも、退屈や孤独の恐怖はないに等しかった。退屈も孤独も、共に平和と繁栄の副産物であることは皮肉である。そしてまた、退屈と孤独でひとは死にはしないから——と世間も思い、自分も思って、その二つは放置されている。しかし、ガンや心臓病ばかりでなくて、悪性の神経痛でも、人間は衰弱して死ぬこともあり得る。この二つに対しては、社会学者も心理学者も、今のところどうしてくれようもないとすれば、自ら予防処置をこうじ、治療するほかはない。

結婚をしさえすれば、この退屈と孤独の責苦からのがれられるような錯覚に、私たちは捕えられるのである。しかしそんな保証はどこにもない。この二つの苦しみからのがれられれば、それだけでもう結婚は成功であると言い切ってさしつかえない。しかし、すべての結婚が成功する訳ではない以上当然、独身時代よりも、もっと深刻に、夫に放置されているという悩みを持つ人もでるはずである。

私は子供を持った時、よく世間で言われるようにわき上がるような母親の喜びを感じたりは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com